

# 「子どもの貧困」の現状

## 社会を大きく巻き込み、認知されにくい課題を提起する

新井直之氏（日本放送協会（NHK）ディレクター）

社会構造が変化していく中、新たな課題として浮き彫りになってきている「子どもの貧困」。その問題について、まだ社会に大きく認知されていない頃から取材にあたり、取り上げてきた新井氏。子どもの貧困の実情と、問題を提起し社会へ大きなうねりを与えるまでの過程を聞いた。

新井氏プロフィール：

あらいなおゆき 1982年、埼玉県生まれ。明治大学法学部を卒業後、2005年にNHK入局。担当した番組に「NHKスペシャル」 「クローズアップ現代」などがある。著書に『チャイルド・ブア 社会を蝕む子どもの貧困』（TOブックス）など。



「子どもの貧困」をテーマとした講演会に登壇する新井氏



さまざまな意見が交わされるパネルディスカッション

—— 子どもの貧困を取り上げるきっかけはなんだったのでしょうか。

**新井：**以前担当していた番組を制作する際、新聞等を調べていく中で見つけたテーマでした。対策は取られつつあったけれど、実態はどうなっているんだろうと。最近では非正規雇用も増えて、子どもを取り巻く経済状況も悪くなってきています。かなり大きな問題なのではと思いました。

—— 子どもがいない世帯だと分かり難いことかもしれません。でも、実態としてはなんとかしなければいけない状況はあるわけですね。

**新井：**社会構造が変わっていく中で、離婚や失業といった親の自己責任論だけでは語れなくなってきていると思います。社会の仕組みや法制度を変えていく必要があると考えています。

—— 貧困の問題は昔からあったのですか。

**新井：**今取り上げている相対的貧困が表面化したのは最近です。絶対的貧困という衣食住に困るほどの貧困については以前から認識されていました。相対的貧困は先進国特有の問題です。最低限の文化的な生活や教育が受けられるかどうか、という点を示すものです。相対的貧困率は80年代から徐々に高くなってきていて、一人親家庭でいうと日本はOECD加盟国の中でワースト1位です。今はファストファッションで衣服も安く買えるので、外見で目立つこともありません。食事も質を落とせば安く済ませられます。そのため周囲からは見えづらく、全く気づかれないことも多いのです。

—— それは郊外だったり都市だったり地域差があるものですか。

**新井：**地域に関わらずある問題ですが、都心だとより孤立しやすく深刻です。田舎だと近所付き合いもあつたり、3世代で暮らしていたりもするのでまだ良い傾向です。また貧困が虐待の原因にもなつたりしますが、背景には離婚が原因の精神疾患があつたりします。取材をしていくとそういう複合的な問題が見えてくるため、メディアの仕事としてはそういう点にもフォーカスしたいと思っています。

—— 世代的なギャップもあつたり、所得の高い地域だったりすると見えてこなかったりします。世代や地域によって意見もまちまちかと思われそうですがどういった意見が多いのでしょうか。

**新井**：自分の世代はもっと大変だったというのはよく出てくる意見です。でも、今の相対的貧困と戦時中の絶対的貧困はそもそも論点が違います。そこから分かってもらわなければいけないので、番組を作るときには「相対的貧困とは」という説明から入ります。同じ土俵に立って議論をするにはそういうことが必要になってきます。

—— 苦しい家庭が増えてきた社会的な背景の一つは経済問題とおっしゃっていましたが、その原因はなんでしょうか。

**新井**：規制緩和により非正規雇用が増えたのが一因かと思います。結果、子どもを育てることのできない賃金で働いている大人が増えています。それと同時に離婚する人も増えて、シングルマザーが増えています。彼女たちの多くが非正規雇用、パートタイムで働いている状態で、子どもを育てるにはお金が足りていません。また、社会的に求められる職能のレベルは高まっている一方で、国立大学の授業料はこの50年で50倍になっています。教育費を払える収入のある家の子どもだけが高度な教育を受けて、子どもを育てられる給与を得られる就職先に勤めることができる、そんな状況です。個々の努力の結果だと思われがちな点ですが、教育を受けさせられる家庭に育った結果とも言えます。

—— その点は伝わっていませんよね。

**新井**：福祉の対策だけでは全然意味を成さないんです。子どもを取り巻く教育や雇用、医療、地域コミュニティなど色々な分野と深く関わってくるので難しいし、だからこそやる意味があるんです。大人の貧困問題は個人の責任の比重が大きく、当事者にも責任があるとされてきました。でも子どもの貧困は批判のしづらい問題で、ある意味、社会的に合意を得やすいトピックです。そこを切り口に改善をしていこうと、各種の団体が活動し、僕らのようなメディアが報道を続けています。

—— 学校だとか自治体とかが子どもの貧困の力になれるケースはありますか。

**新井**：足立区では子どもの貧困の部署を日本で初めて設置し、全庁を挙げて取り組んでいます。公園を整備して、イベントを開くことによりシングルマザーの子どもで行き場をなくしている子を見つけて支援につなげるなど、一見関係のなさそうな都市計画課も含めて対策に取り組んでいます。

—— ランドスケープの分野も子どもの貧困対策に貢献できそうですね。

**新井**：そうですね。例えば、東京都北区のある銭湯には子どもたちがよく遊びに来ます。番台のおじさんは長年、地元の学校で不登校の生徒の相談に乗ったり、地域で見回り活動をしています。彼は学校の先生や弁護士やケースワーカーや保健師などのネットワークを持っていて、すぐに子どもたちを救う手立てを考えることもできます。この銭湯のような役割を担える場を、デザインとして街の中に埋め込むことはできないでしょうか。子どもを支援したいという人や団体はあちこちにありますが、子どもからアクセスするにはハードルが高いのが実情です。こうした距離を埋めるには、ランドスケープの力が必要なのではないかと思っています。

—— 話は変わりますが、ランドスケープの分野はまだ世の中にあまり認識されておらず、我々はこの分野をみんなに知ってもらいたいという思いがあります。知られていないトピックを社会に理解してもらうにあたって、新井さんがどのような努力や工夫をされてきたか、とても関心があります。

**新井**：異業種の人を如何に巻き込むかを考えてきました。子どもの貧困問題にしても福祉や教育以外の人をどう巻き込むかという点です。先日制作した番組でも第一線で活躍するビジネスマンや、若者から支持されているタレントを呼んだりしました。そんな風に、問題に対して直接的な関係を持たないセクションにいる人たちに、いかに関心を持ってもらうかを意識しています。

最終的には政治を動かすしかないのかもしれませんが、政治を動かす上で票を持つ高齢者やビジネスマン、発言力のある人に如何に届けるかです。僕らの仕事の一つは、社会のマイノリティーの声や問題を如何に届けるかだと思いますが、それらはマジョリティーや発言力のある人たちを通さないと世の中に伝わらないと考えています。いつまでも福祉の分野の中に留まっていたらこうはならなかったと思います。そんな風に、ランドスケープの世界も違う分野の人たちを巻き込んでいけば良いのではないのでしょうか。

—— やはり王道を行くということなんですね。今日はありがとうございました。